

『パウロに与えられた務め①』

'22/05/29

聖書箇所:エペソ人への手紙 3章 1-6節(新約 p.375-)

偉大な信仰者でもあったダビデは、詩篇 57 篇や 108 篇で、神様のことをこのように賛美しています。『あなたの恵みは大きく、天(の上)にまで及び、あなたのまことは雲にまで及びからです。』(詩篇 57:10; 詩篇 108:4)⇒このダビデ王に限らず…、また詩篇に限らず、この聖書のみことば全体が教えてくれます！「神の恵みは計り知れないほど大きい！」って…。しかし、残念ながら、私たち人間が持つ知性の問題や心の狭さ、あるいは、罪といったものが、本当は素晴らしい…、神様の恵みというものを実際よりも小さいものと考えてしまいます。それは、いつの時代の人間たちにも当てはまるものだろうと思います…。

皆さんは、こういった経験をお持ちではないでしょうか…皆さんが、愛する家族や友人に対して、何かひどいことをしてしまって、「もう2度と私のことを許してくれないかも知れない…。すごく怒っているだろうな。もし、これが反対の立場で、自分に対してされていたら、すごく怒るし、絶対に許さないかも知れない。」…そんな風に考えていたのに、その相手は意外にもあっさりとして許してくれた、なんていうことが…。

例えば、ルカ 15:11-32 に、有名な「放蕩息子の例え」という話があります。第息子が、その父親に対して、「許されないようなひどいことをしてしまった…」と気付いて、悔い改めて家に帰ると、その父親は怒るところか、その第息子が帰ってくることを心待ちにしている…、やさしく迎え、手厚くもてなした、という話です。皆さんもご存知のように、この父親とは、真唯一の神様を表わしています。この話は、私たちの考える以上に、「私たちの造り主であられる真の神様は、私たちのことを愛してくださっている、恵み深い御方である」ということを教えてくれます。

命題: 神がパウロに与えてくださった務めとは？

今日から多分3回の礼拝で、私たちは、このエペソ 3:1-13 を通して、神様がパウロに与えてくださった務めというものを見ていくことによって、偉大なる神様の恵みというものを、再確認していきたいと思えます。神様は、何とかして…、私たちに恵みというものを与えようとしてくださっておられます。実は、そういったことのために、パウロという人物が神様によって選ばれたのです。神様は、そのパウロに対して、ある務めを与えられました。それは、私たちにに対して、本来ならば、受けることのできなかつたような良いものを与えるための、神様の御意志であったのです。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、エペソ 3:1-6 をお聞きください。

I・パウロに務めを与えられた、神様の「ご計画」！(1-6節)

神様はパウロという人物を選んで、彼に特別な務めを与えることによって、御自身の御計画に用いようされました。今日のところは、その神様の御計画ということについて観察していきたいと思えます。今日のみことばであるエペソ 3:1-6 には、こう記されてあります。

- 1 こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。
- 2 あなたがたのためにと私がいただいた、神の恵みによる私の務めについて、あなたがたはすでに聞いたことでしょう。
- 3 先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。
- 4 それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずですが。
- 5 この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。
- 6 その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。

① 神は救った者を 用いて くださる！(1-2節)

まず、ここ1節で、パウロは自分のことを、『キリスト・イエスの囚人』であると話しています。以前、皆さんにお話ししたように、確かに、パウロはこの時、投獄されていました。だから、このエペソ 6:20 にも、『私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、折ってください。』とあるのです。

どうして、そんなことになったのか？パウロは、エルサレムで主イエス様についての証しをした時(使徒 22:1-21)、イスラエルの民たちから殺されそうになり(使徒 21:22-30)、そのことがきっかけで、彼はローマに連れてこられました。まさに、この手紙を書いていた時、パウロはローマの家で軟禁状態にあったのです(使徒 28:30-31)。普通に考えるならば、この時、パウロはローマ帝国の、一囚人でした。言い換えれば、異邦人の囚人、または、「異邦人によって囚人とされた」と言っても過言ではありませんでした。しかし、パウロはそうは言いませんでした。彼は、自分のことを、『あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった…』と言うのです。

パウロははっきりと教えてくれています！また、聖書全体がそうなのですが、「真の神様は、ちゃんとした御意志をお持ちである！」って…。神様は、いろんなことを…、いえ、すべてのことを自らの計画に沿って、事を行なわれるのです。だから、私たちクリスチャンは言うのです、「すべてのことに偶然は無いです！」って…。すべてのことは必然なのです。何故なら、全知全能なる神様がその背後にいらっしゃる、神様のみことばで無いことは何一つ起こり得ないのですから…。

まさしく、パウロは、ここで彼自身が告白しているように、『異邦人のために…』召された神の器でした(使徒 9:15)。パウロは、自分が「神様から与えられた務め」というものをしっかりと理解していたのです。

ここ2節で、『あなたがたのためにと私がいただいた、神の恵みによる私の務め』と訳されてある言葉(οἰκονομία)は、「管理、任務、家令(=教会の執事ではなく、家の事務的な執事職のこと)」というような意味を持っています。つまり、パウロは、「私は神の恵みの管理者として、神のことを人々に伝えていくという働きを、神から与えられたのだ！」と言っているのです。

でも、そういった点において、そのような働きはパウロ“だけ”に与えられた使命ではありません。神様は、ここにおられる皆さんにも、また、私にも同じ使命…、同じ務めを与えてくださいました！だから、みことばはこう教えます。マタイ 5:16、『このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。』⇒これは、イエス様を救い主と信じる、すべての信仰者に与えられた神様からの務めです。また、I コリント 6:19-20 でも、『19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。 20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。』⇒救われた私たちは、もはや、自分自身のためだけに生きるのではなく、神様の栄光…、つまり、神様の素晴らしさを現わすために生きていくのです。

どうぞ、皆さん。マタイ 25 章をご覧ください。ここには、3つの例え話があります。当然、この話は 24 章から続いているものですが、ここでイエス様が何を教えたかったかは、明白ですよ。本当に救われている者と、そうでない者との違いです。その2つめの例え…、マタイ 25:14-30 をご覧ください。『14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。 15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。 16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。 17 同様に、二

タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。19 さて、よほどたつてから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひい方だとわかっていました。25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまげ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。』

⇒皆さん、ここで語られている例えの中の…、『財産』を何だと思われませんか？…ある人は、これを霊的な賜物であると考えられるかも知れませんが、それは正しくありません。何故なら、もし、そうなら、救われていないはずの1タラント預かったしもべも、霊的な賜物を頂いていることになってしまうからです。聖書は、明らかに、イエス様を信じた者にだけ、信じる前には無かったはずの…、特別な資質と言うか…、教会の中で用いるべき特別な、奉仕の才能を与えてくださるということを教えてくれています(ローマ 12:6-8; I コリント 12:4-11,28-30; I ペソ 4:7-12)。

じゃあ、本当に救われていたしもべたちと、1タラントを預かったしもべと、何が違っていると、イエス様はおっしゃっておられるのでしょうか？⇒ここで、『タラント』と訳されてある言葉(τάλαντον)は、基本的には、重さや通貨を表わす単位¹で、この当時は、1タラントで約 6000 日分(=20 年分)の賃金に相当しました。英語では、持って生まれた特別な才能を指したり、一部の芸能人たちのことを「タレント」という、その言葉の語源となっています。

当然、ここでは、こういった意味で使われているわけではありません。多くの解读者たちは、この…、主人が託した「タラント」を、一般的な恵みを象徴的に表わしたものと考えます。つまり、神様から与えられたいのちに始まり、その他の環境…、健康や能力、与えられた仕事や家族、友人など、また様々な経験や、当然、生まれながらの才能なども含みます。そのように、神様は、実に、すべての者に、多くの恵みを与えてくださっております。実際、そうですね？まさしく、**マタイ 5:45** で、『…天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上げせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。』と教えられてある通りです。救われたクリスチャンたちは、そういった神様から受けた数々の良い…、恵みというものを、自分のところだけに置いておくとするのではなく、それらを用いて、神様のために活用しようとするのです。

¹ 「はかり、天びん」の意から、量られたものとして①(重さの単位)タラント; 正確な重量は時代により、国により異なったが、新約時代の重量単位としては大体 41kg(教文館「聖書大事典」838 頁のBの数値)。②(通貨の単位として)一タラントの重さの銀の価格、実際には6,000デナリに相当した(上掲書)という。現代の貨幣価値に正確に換算することは不可能だが、当時の一日の労賃の6,000倍ということから推定する他はない。

一方、本当は救われていなかった…、1タラントを預かったしもべはどうでしょうか？⇒そのしもべは、その大事な預かり物を盗もうとしたわけでも、無駄に使ったわけでもありませんでした…。しかし、彼は、こんなことを、その主人に対して言うのです。24-25 節、『24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひい方だとわかっていました。25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』』⇒「私は、神様から託された財産を一切、用いなかった」と言うのです。そればかりではありません。それだけ、多くの財産を託して下さった主人のことを、『あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひい方だとわかっていました。』と言い、その財産を用いなかったことの言い訳にしているのです。だから、その主人は、そのしもべに対して、『悪いなまげ者のしもべだ。』(マタイ 25:26)と言うのです。この悪いしもべは、自分がこの主人のしもべであることを喜んでおられるのでしょうか？この主人のために生き…、自分の主人を喜ばせようとして、生きていたのでしょうか？…明らかに違います！

それに対して、5タラントや2タラントを預かったしもべたちはどうだったのでしょうか？⇒彼らは、その主人を愛し、その主人を喜ばせようとしていました。だから、21 節や23 節に、『主人の喜びをともに喜んでくれ。』とあるのです。ここ、21 節や23 節で、『よくやった。良い忠実なしもべだ。』とありますが、ここで、『忠実』と訳されている言葉(πιστός)は、聖書箇所によっては、「救われた者」を指すような言葉です。例えば、II コリント 6:15、『キリストとペリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。』とある…、『信者』と訳されてある言葉がそうです。他にも、ガラテヤ 3:9、『そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。』とある、この『信仰の人』という部分がそうです。

つまりね、皆さん。救われた者は皆、神様に対して忠実であろうとするのです！真の神様のことを喜ばせようとするのです！何故なら、天の神様は、自分たちにたくさんの恵みを与えてくださっただけじゃない…、こんな私を救うために、どれほど大きな犠牲を払ってくださったのかを、よく知っているからです。何より、神様御自身が、救われた者たちのことを、神を愛する者へと変えてくださったからです。…だから、イエス様を信じて救われたクリスチャンは、この神様のことを、誰か他の…、まだ神様のことをご存知ない人たちに伝えようとするのです。

そういったことは、このエペソ書を書いたパウロや、一部のクリスチャンたちにだけ限定されるものではありません。救い主なるイエス・キリストを信じて、本当に救われたクリスチャンすべてに共通することなのです。

②異邦人であっても、ユダヤ人たちと等しく、救いをいただける！(3-6 節)

ここ3-6 節には、『奥義』という言葉がありました。これは、ギリシヤ語の「μυστήριον」という言葉で、英語の「mystery」の語源ともなった言葉です。この言葉は、世間一般的には、何か理解しがたいような…、神秘的なものなどを指すと考えられているかも知れませんが、聖書の中では、「かつて隠されていたものが、今は現わされて、明らかにされている真理」のことを指します。パウロは、3 節で、その『奥義』というものが、『啓示によって私に知らされた』と言います。『啓示』というのは、私たち人間の知恵だけでは、到底、理解できないようなことを、神様が私たち人間に対して示して下さることです。つまり、パウロ自身が伝えてきた奥義…、すなわち、神様からのメッセージは、「神様が、まず私に知らせてくださったから、私は理解できたのだ」とパウロは言っているのです。

では、その『奥義』が何かと言いますと、6 節にははっきりと書かれています。『その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。』⇒この個所のギリシヤ語の表現を見ますと、「一緒に、共に」という言

葉が、意識して多く使われているということが分かります。例えば、『…異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となる…』といった具合です。

パウロが、ここで強調したかったことは、神が選ばれた選民のイスラエルだけでなく、異邦人たちも、また同じ神の福音によって…、つまり、イエス・キリストを信じる信仰によって救われる、ということでした。

皆さん、一体、これがどういうことなのか、お分かりになってくださいますか？⇒正直、今の私たち日本人は、こういったことを聞かされても、あまりピンときません。…と言うのも、私たちは、初めから、このイエス・キリストを信じる信仰によって、民族や人種、性別などの区別なく…、共に同じように…、「神の子」とされるということを聞いているからです。

しかし、5節をご覧くださいと分かるように、『この奥義は、…前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。』とあって、明らかに聖書は、『時代』というものが異なったために、『奥義』というものの取り扱いに、大きな変化があったということを示唆して(=教えて)くれています。

旧約の時代であっても、確かに数は少なかったですが、異邦人たちは救われていました…。例えば、イエス様の先祖になった、ルツ(=モアブ人)などがそうです。しかし、それらは二次的な状況でしかなく、あくまでも、救いの中心はイスラエル人たちでした。…ですから、その当時の、異邦人たちの救いというのは、決して、多くはなかったですね？

これは少し前にもお話ししましたが…、この当時のイスラエル人のある者たちは、異邦人たちのことを、「裁かれて当然。異邦人は、地獄の炎のたきぎ代わりである。」などというように考えていたのです。…だから、そんなイスラエル人たちからすると、その異邦人たちが、神様の恵みによって救われ…、共に、『共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となる』なんていうことは、彼らからすると考えもしなかったことなのです！増してや、その…、神様の救いの御計画というものの中心が、イスラエルから異邦人に移って変わってしまう、などとは、予想もできなかったのです！

残念ながら、この当時のイスラエルの民たちは、アブラハム契約などを見てもそうですが、「神は、地球上のすべての民族を祝福しようとしておられる」などということに、ほとんど気付いていなかったのです。

一体、何故なのでしょう？⇒もちろん、神様がそういう理解をユダヤ人たちに与えられなかったということもあるでしょうが、ある意味において、最も大きな原因は、イスラエルの民たちが、「神様の恵みというものが、如何に大きいものであるのか？」ということを理解していなかった…、また、そのことに目を向けようとしていなかったからです。

そのことを、私たちに示してくれる聖書のみことばを1つ、紹介させてください。それは、旧約聖書のヨナ書です。ほとんどの皆さんは、この話をよくご存知だろうと思います。神である主は、ヨナという人物に、「ニネベの町に行き、神の裁きが下ろうとしているということを語れ！」と命じるのです。しかし、ヨナは、神様のみこころに逆らおうとして…、全く別の方向に逃れようとした。実は、この、『ニネベ』の町は、後に北王国イスラエルを滅ぼすことになる、アッシリヤの都であったのです。

しかし、その後、神様は不思議な方法によって、ヨナを悔い改めさせ…、ニネベの町に遣わされました。そこで、ヨナが語ったメッセージによって、ニネベの者たちは神様の前に悔い改め、神様の裁きが下らなかつたというのが、3章までの話です。その後の、ヨナ書 4:1-3 にこうあります。『1 ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、2【主】に祈って言った。「ああ、【主】よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへのがれようとしたのです。私は、あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわざを思い直されることを知っていたからです。3【主】よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きていますより死んだほうがまし

です。』⇒ここで、ヨナは、真の神様が、『情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわざを思い直されることを知っていた』ということ告白しています。彼は、自分がニネベに行き、神様の怒りを説いて…、ニネベの民たちが悔い改めたら…、ひょっとしたら、そのニネベの人たちが滅ぼされないうちも知れないということを知っていた！と言うのです。

このように、残念ながら、ヨナは、神様が、異邦人たちが滅んでいくことについて、どれほど、心を痛めていらっしやるかということに気付いていなかったのです。ヨナは、神様の恵み、神様の憐れみというものを過小評価してしまっていたのです。…そのようなヨナに対して、神様は、とうごまを用いて、神様の恵み深さ、憐れみ深さを教えられました。ヨナ書 4:4-11、『4【主】は仰せられた。「あなたは当然のこのように怒るのか。」5 ヨナは町から出て、町の東のほうにすわり、そこに自分で仮小屋を作り、町の中で何が起るのを見きわめようと、その陰の下にすわっていた。6 神である【主】は一本のとうごまを備え、それをヨナの上をおおように生えさせ、彼の頭の上の陰として、ヨナのなきげんを直そうとされた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。7 しかし、神は、翌日の夜明けに、一匹の虫を備えられた。虫がそのとうごまをかんだので、とうごまは枯れた。8 太陽が上ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は衰え果て、自分の死を願って言った。「私は生きていますより死んだほうがましだ。」9 すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のこのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」10【主】は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。11 まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえぬ十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。』

⇒ここでなされたやり取りに関して、特に説明する必要は無いと思います。…私たちは、こんな風に感じるのかも知れませんが、「神様から見た時、ちっぽけな私たち人間なんて、どうでも良いような存在に違いない…」って。確かにそうです。神様から御覧になった時、70億を超える人間の内、例え10万や20万人が死んだり、苦しんだりしたところで、そのことで、神様御自身が何か困られるわけではないでしょう…。

でも！神様の憐れみや恵みは、私たちが想像する以上のものです！皆さんが、これ以上無いといううな、最高の恵みや憐れみというものを想像して下さっても、実際の神様の恵みや憐れみ…、そして、愛といったものは、そのはるか上を行くものなのです！

だから！神様は、ひとり子であられるイエス様を、私やあなたのために遣わしてください！ちょっと、皆さん。ルカ 15:1-10 をご覧ください。『1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしようか。5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。8 また、女の人が銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしようか。9 見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、『なくした銀貨を見つけたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。10 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。』

⇒この当時、イスラエル人でありながらローマ帝国の手先となって、ローマの税金を徴収していた『取税

人』や、旧約聖書の律法だけでなく、神様の教えない言い伝えなどを守ることができなかつた人たちは『罪人』とされ、当時の社会から虐げられていました…。イエス様が、そんな者たちにも、積極的に、神の話、救いのメッセージをされたものですから、それに対して、『パリサイ人、律法学者たち』はころよく思わなかつたのです。

でも、イエス様は、これらの例え話を、そこにいた取税人たちだけでなく…、パリサイ人や律法学者たちにも話されたのです。いや！ここでイエス様が話された内容を見ると、イエス様はパリサイ人たちにも悔い改めを説かれていたはずです！…そのように、例え、その人がどのような者であっても、1人の罪人が救われたら、天で、『御使いたち』が大喜びすると言うのです！それだけではありません。このすぐ後のみことばは、あの有名な放蕩息子の話です。その弟息子は、どうしようもない子どもで…、せっかくあげた財産を湯水のように使い果たしてしまいました。しかし、その父親はどうだったでしょうか？⇒「もう帰ってくるな！」とは言いませんでした。それどころか、その弟息子が帰ってくることを心待ちにしている…、帰ってくるなり、お詫びの言葉も言い終わらない内に、その弟息子を抱きしめるのです！この父親とは、私たちの父なる神様のこと。神様は、ここにおられる全員が神様を信じて、救われることを願ひ、そのことを心待ちにしておられるのです！

<励ましの言葉>

確かに、真の神様は、最高の愛を御持ちで、恵み深く、憐れみ深い御方であられます。時々、神様の御性質の中の、義(＝正しさ)や聖(＝聖さ)といったものが、愛や憐れみ・恵みなどとは相反するような…、そんなことを話される場合があるかも知れませんが、決して、そうではありません！神様が最高の愛をもって、私たちを愛してくださったから…、神様が憐れみや恵みに富んだお方であられるから…、神様は、私やあなたが間違ったことをした時に、懲らしめをなさるのです。神様が、時に、私たちを懲らしめられるのは、神様が私たちを愛していないからでしょうか？あるいは、神様が本当は憐れみ深くないからでしょうか？

違いますでしょ？…どうぞ、今度は、ヘブル書のみことばに注目してみてください。ヘブル 12:5-11、『5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」7 訓練と思つて耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱つておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であつて、ほんとうの子ではないのです。9 さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちが彼らを敬つたのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思つたままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえつて悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。』

⇒いかがでしょう？最近の…、甘やかし過ぎる親御さんによく考えてほしいみことばですよ。神様は、皆さんを愛しておられるから、時に厳しく接して下さるのです！ひよつとしたら、皆さんは今、こう考えておられるかも知れませんが、「神様、こんな環境では無理です。こんな問題があつたらできません。こんなこと、実行できっこありません。」つて…。

でも、それこそが、神様の本当の愛であり、また、みこころであり、…と同時に優しさなのです。皆さん、もし、皆さんがコーチで、自分の選手を最高の選手に育て上げようとしたら、毎日毎日、どんなレッスンを与えます？⇒恐らく、その選手が、越えるか越えられないかのギリギリのハードルを与えないでしょうか？失

敗しても良いのです！失敗しても、次にまた、チャレンジして…、挑戦し続けて、いつか必ず越えられたら、それで良いのですよね？当然、時々、簡単に越えられるようなハードルに挑戦させることが有益な場合もあるでしょう。しかし、その選手が喜ぶからと言って…、その選手が楽々越えられるようなハードルばかりを与え続けられないでしょ？もし、そんなことをしていたら、その選手はどうなりますか？明らかに、成長する機会を失うばかりか…、選手としても、ひよつとしたら人間としてもダメになってしまいます…。

だから、1 コリント 10:13 では、こう教えられてあるのです。『あなたがたの会つた試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。』⇒神様は、クリスチャンであられる皆さんの…、更なる霊的な成長を願つておられるのです！

ですから、どうか、皆さん…。神様の、厳しいけれども大きな愛に…、また恵みに目を向けてください。「神様は、私のことなんてどうでも良いのだ。」…決して、そんなことはありません。もし、神様があなたに関心がないのなら、あなたは今日、ここにいらつしゃらないはず。神様は、必要なくなった者の命をいつまでも与え続けるようなことはなさいません。今、ここに皆さんがいらつしゃるということは決して、偶然ではありません。どうぞ、神様の愛を感謝して、毎日を神様の喜ばれるように歩いていってください。

そうして、まだ、イエス様のことを信じておられない皆さん。天の神様は、皆さんのことも愛して、たくさん恵みを与えてくださっています。今日、皆さんが生かされているのも…、また、このメッセージをお聞きになつたのも、決して偶然ではありません！神様の御計画の一部なのです。どうか、あなたのことを造つただけでなく、あの十字架と復活によって救いの道を完成して下さつたイエス・キリストのことを1日も早く信じ救われてください。心からお勧めいたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。